



徳川時代の教育(二)

寺子屋教育で識字率向上

徳川宗家十八代当主・静岡商工会議所最高顧問 徳川恒孝つねなり



季奉公に入るのが普通でした。

この見習い期間中は無給でしたが、食事・住居・衣類は奉公先が負担し、多少の小遣いを与える程度でした。そして子供たちは奉公先で働きながら、仕事と社会人となることをキツチリと習い、だいたい十年で一人前の大人になって、親元にもどるか、独立するか、勤め先でさらに上にいくのかを選んで、世間に出ていきました。

子供たちを立派な社会人に育てて社会に還元することは、子供を預かった商家や職人の親方の信用の問題でもありました。間違っても世間に批判されることのないように細心の教育がなされたのは当然でした。一つの社会全体が子供たちや若者の教育を温かく、また厳しく見つめて育てていた世界がそこにはあったと感じます。



今川状(早稲田大学図書館蔵)。今川状は、今川貞世(出家して俊)が、弟・仲秋の遠江での政治が悪いことを案じ、為政者としての心得二十三カ条を述べた指南書。江戸時代、寺小屋の教科書として使われた。

武士以外の教育システムについて書きます。江戸時代の子供たちは七歳か八歳になると手習い塾(寺小屋)に入りました。手習い塾の教育は生徒一人一人に対する個人教育です。お師匠さんは子供たち一人一人の必要とする「学び」を、注意深く検討し、教材を揃えて学ばせてゆきました。一人一人が別のプログラムで進みますから「落ちこぼれ」生徒は存在しない方式でした。

そして入学から五、六年の間に、読み書きと算盤の基礎に加えて、子供たちが社会の中で生きていくために必要な知識や習慣、手紙を書くときに必要な時候の挨拶や冠婚葬祭の儀礼、商売に必要な書類の作り方、地理や付近の街道筋の地名などを学び、その教材の中から道徳的な教えも学んで

いったのです。商人になる子には「商売往来」(往来とは往復の手紙の形で書かれた教材のこと)、職人の子供であれば「百工往来」「大工注文往来」「左官職往来」などで道具や材料の名前、その職に必要な専門の言葉などを学んでゆきました。

教材は各人異なっていますが、重要視されたのは、美しい筆跡でわかりやすく文字・文章を書く能力でした。それが「手習い」です。この結果、幕末の日本人の識字率は世界一でありました。

さて、男の子たちは、この手習い塾での「学び」を十二歳から十三歳で終えて、親元を離れて住み込みで仕事の見習いになります。商家に丁稚奉公に入るか、職人の親方のところに入るか、職人になる子には